

Title	分節音とアクセント(1) : 岡山方言の分析から
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 64 p.169-p.184
Issue Date	1984-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80977
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

分 節 音 と ア ク セ ン ト (1)*

—岡山方言の分析から—

角 道 正 佳

Segment and Accent (1)

—Analysis of Okayama Dialect—

KAKUDO Masayoshi

This is the revised edition of the paper presented to Kyoto University in 1975 as a progress report. The main purpose of this paper is the description of my idiolect based on Generative Phonology. In Part I, I presented seven analyses treating noun conjugations (i.e. noun+case marker). Evaluations of these analyses considering simplicity, independent motivation of the rules, naturalness, etc. show that the following is the best analysis.

- i) Case markers have short vowel in underlying form.
- ii) j-insertion must be applied within the stem and not between the stem and the case marker.

The necessary rules to derive the correct surface forms from their underlying forms are;

j-insertion
progressive assimilation
regressive assimilation
j-deletion

Underlying forms			Surface forms		
saka &a	saka &o	saka &e	sakaa	sakaa	sakee
?ami &a	?ami &o	?ami &e	?amjaa	?amjuu	?amii
?inu &a	?inu &o	?inu &e	?inaa	?inuu	?inii
?ie &a	?ie &o	?ie &e	?ijaa	?ijoo	?iee
soto &a	soto &o	soto &e	sotaa	sotoo	sotee

I. 序

1.1 問 題 点

本稿を書くきっかけとなったのは、東条操監修『方言学講座』第三卷西部方言、三、方言の実態と共通語化の問題点、6. 岡山、広島、虫明吉治郎を読んだことにある¹⁾。特に、名詞の曲用

形に関する形は、本稿の出発点でもある。ここに、その表を引用してみよう²⁾。

	原形	ハ格	ヲ格	ニ、ヘ格
(坂)	saka	sakaa	sakaa	sakee ³⁾
(網)	?ami	?amjaa	?amjuu	?amii
(犬)	?inu	?inaa	?inuu	?inii
(家)	?ie	?ijaa	?ijoo	?iee
(外)	soto	sotaa	sotoo	sotee

この表にある形を生成する規則を書くことは、さほどむずかしいものではない。基底形として原形⁴⁾ 及び原形に a, o, e を付加したものを与えておき、j 挿入、進行同化、逆行同化などの合計 5 つの規則があれば十分である。

- (1-1) $\phi \rightarrow j / - \left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\} \& V$ (j 挿入)
(1-2) $o \rightarrow a / a \& -$ (進行同化)
(1-3) $\left[\begin{smallmatrix} e \\ o \end{smallmatrix} \right] \rightarrow \left[\begin{smallmatrix} i \\ u \end{smallmatrix} \right] / \left\{ \begin{smallmatrix} i \\ u \end{smallmatrix} \right\} \& -$ (進行同化)
(1-4) $V_1 \rightarrow V_2 / - \& V_2$ (逆行同化)
(1-5) $j \rightarrow \phi / - \& \left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\}$ (j 消去)

派生は次のように行われる。

/ saka & a / / saka & o / / saka & e / / ?ami & a / / ?ami & o / / ?ami & e /						
						?amji & a ?amji & o ?amji & e 1
saka & a						2
						?amji & u ?amji & i 3
sake & e ?amja & a ?amju & u						4
						?ami & i 5
sakaa	sakaa	sakee	?amjaa	?amjuu	?amii	
/ ?inu & a / / ?inu & o / / ?imu & e / / ?ie & a / / ?ie & o /						?ije & a ?ije & o 1
						2
						?inu & u ?inu & i 3
?ina & a		?ini & i	?ija & a	?ijo & o		4
						5
?inaa	?inuu	?inii	?ijaa	?ijoo		
/ ?ie & e / / soto & a / / soto & o / / soto & e /						?ije & e 1
						2
						3
						sota & a sote & e 4
?ie & e						5
?iee	sotaa	sotoo	sotee			

しかし、よく考えてみると、ハ格の基底形が/a/であるのは問題がないにしても、ヲ格の基底形が/o/でなければならない理由はなさそうである。ヲ格の基底形として/a/を選ぶと、ハ格との区別ができなくなってしまうので、困るけれども、/u/でもよさそうである。同様に、ニへ格も/i/であってもよさそうである⁵⁾。ただこう考えると(1-2)、(1-3)を次のように変える必要がある。

(1-6) $u \rightarrow a / a \ \& \text{ — }$ (進行同化)

(1-7) $\begin{bmatrix} i \\ u \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} e \\ o \end{bmatrix} / \left\{ \begin{bmatrix} e \\ o \end{bmatrix} \right\} \ \& \text{ — }$ (進行同化)

しかし、さらによく考えてみると、これでは〈赤い〉の音便形 ?akoo を /?aka&u/ から派生できなくなる。つまり、/?aka&u/ に(1-6)が適用されると、*?akaa となってしまうわけである。逆に、〈赤い〉の ?akee を /?aka&i/ から派生するには、(1-3)ではなくて(1-7)が必要である。動詞についても、たとえば、〈食べよう〉 tabjoo, 〈書こう〉 kakoo に対して、〈起きよう〉 okjuu という形がある。これは(1-3)で説明できそうである。これらすべてをうまく説明するためには、どういう条件でどうなるのかを正しく規定する必要がある。例えば、〈買った〉 koota, 〈会った〉 ?oota に対して、〈買う〉、〈会う〉がなぜ koo, ?oo ではなくて、kau, ?au なのか⁶⁾。〈食べよう〉、〈起きよう〉では tabjoo, ?okjuu というように j があるのに、〈書こう〉 kakoo ではなぜ j がないのか。一方〈食べている〉 tabjooru, 〈起きている〉 okjuuru, 〈書いている〉 kakjooru にはなぜすべて j が現われるのか。〈食べる〉 tabe'ru, 〈食べさせる〉 tabesase'ru, 〈食べられる〉 taberare'ru などのように、一方では ru の直前にアクセント核があり、他方では〈食べた〉 ta'beta, 〈食べさせた〉 tabesa'seta, 〈食べられた〉 tabera'reta のように、ta の二つ前の音節境界にアクセント核があるのに、〈食べたす〉 ta'bedasu や〈食べたした〉 ta'bedafita はなぜそうならないのか。ta'bedasu や ta'bedafita のアクセント核の位置が、〈食べている〉 ta'bjooru, 〈食べていた〉 ta'bjotta と同じであるなら、〈やっている〉 jarjo'oru, 〈やっていた〉 jarjo'otta のアクセント核の位置はどう説明したらいいのか。

〈食べている (継続)〉 tabjooru と〈食べている (or ある) (完了)〉 tabetoru はそれぞれ、/tabe&or&ru/, /tabe&t(e)&or&ru/ から派生された形であると考えられるが、なぜ tabjooru では長母音になるのに、tabetoru ではならないのか。〈食べよう〉 tabjoo, 〈食べている〉 tabjooru などの j は、〈網は〉 ?amjaa の j と同じ性質のものなのか。〈買う〉は *koo とならないのに、なぜ〈言う〉、〈言った〉は juu, juuta となるのか⁷⁾。

これらの現象を説明するためには、事実を表にして配列するだけでは不十分である。記述自体に生産性 (productivity) がなければならない。例えば、〈食べている〉 tabjooru, 〈書いている〉 kakjooru, 〈捨てている〉 fitfooru, 〈やってくる〉 jarjooru から、jooru という要素を取り出すことができ、さらに〈食べていた〉 tabjotta, 〈書いていた〉 kakjotta, 〈捨てていた〉 fitfoota, 〈やっていた〉 jarjoota と並べてみることによって、joor&ru, joor&ta という形を取り出すことができるので、結局 joor という形態素が抽出できることになるが、ここでやめてしまうと、アクセントの説明が完全に遊離してしまうことになる⁸⁾。最終的には本文で述べるように、/or/ という形が抽

出されることになる。

1.2 記述の対象

記述の対象は、筆者の idiolect であり、岡山方言の話者同志の会話において比較的若い層の間で用いられているスタイルである。年齢差による違いはかなりあると思われる。例えば、筆者の祖母(Ⅰ)と父(Ⅱ)と筆者自身(Ⅲ)で次のような違いが見られる⁹⁾。

	〈赤い〉	〈白い〉	〈食べよう〉	〈やろう〉
I	ʔakæ'æ	fire'e	tabjo'o	jajoo~jaro'o
II	ʔake'e	fire'e	tabjo'o	jaroo~jaro'o
III	ʔake'e	fire'e	tabjo'o	jaro'o

I では ææ/ee 及び oo~o'o/oo の対立があるのに、II では ææ/ee の対立は中和してすべて ee になっている¹⁰⁾。III ではさらに oo~o'o/oo の対立も失われてすべて o'o になっている。本稿で扱うのはIIIのスタイルのものである。しかし、ʔake'e, fire'e, tabjo'o, jaro'o をそれぞれ、ʔaka'i, firo'i, tabejo'o, jaro'o と発音する場合がある。これは、I, II, IIIを通じていえることである。このスタイルを岡山標準語と呼ぶことにする。全国の標準語との違いは、前者が ʔaka'i であるのに、後者が ʔakai であるところにある¹¹⁾。もう少し違った例で示すと、次のようになる。

	〈牛は〉	〈牛も〉	〈牛に〉	〈牛へ〉
全国標準語	ʔufiwa	ʔufimo	ʔufini	ʔufie
岡山標準語	ʔufiwa	ʔufi'mo	ʔufini	ʔufie
岡山方言 I, II, III	ʔufaa	ʔufi'mo	ʔufii	
	〈食べろ〉	〈捨てろ〉	〈書け〉	〈やれ〉
全国標準語	tabe'ro	sutero	ka'ke	jare
岡山標準語	tabe'ro	sute'ro	ka'ke	jare
岡山方言 I, II	ta'be	fite'e	ka'ke	jare'e
岡山方言 III	ta'bee	fite'e	ka'kee	jare'e

1.3 表記

表記は IPA を用いる。ただし、母音の細かい音価は区別しない。長母音は : ではなく、母音を二つ並べて表す。形態素内部には、すでに音声規則が適用されているものとする。したがって、〈して〉は、/site/ ではなく、/fite/ と表す。〈落として〉/ʔotos&te/ が ʔotofite となるのは、別の規則による。〈豆腐は〉は、/toohu&a/ ではなく、/tooʔu&a/ でなければならない。なぜなら、tooʔaa は、/toohu&a/ からは派生できないからである。形態素内部に適用される規則については述べない。

アクセント核は ' で表す。実際の音との関係は次のようになっている。

音韻解釈				実際の音形			
	1	2	3	1	2	3	
a	/M/	/M M/	/M M M/	<u>M</u>	<u>M</u> <u>M</u>	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	
b	/M'/	/M' M/	/M' M M/	<u>M</u>	<u>M</u> <u>M</u>	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	

c	/M M' /	/M M' M /	<u>M</u> <u>M</u>	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>
d		/M M M' /	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	

なお、/ʼM/ のようなものがある。たとえば〈も〉/ʼmo/ は、〈牛〉/ʔufi/ に付加されると、ʔufiʼmo すなわち、ʔufimo となる。

名詞及び助詞は、各語彙についてアクセント核の有無、もしあればその位置の指定が必要である¹²⁾。動詞の語幹は、アクセント核の有無だけが指定してあればよい。動詞の語尾は、アクセント核の有無、位置、predominating か否か、attraction を必要とするか否かなどの指定が必要である。形容詞の語幹は、すべてアクセント核を持っているので、指定はいらない。

II. 分 析

2.1 名 詞

2.1.1 デ ー タ

	原形	ハ格	ヲ格	ニ、ヘ格 ¹³⁾
(坂)	sakaʼ	sakaʼa	sakaʼa	sakeʼe
(網)	ʔamiʼ	ʔamjaʼa	ʔamjuʼu	ʔamiʼi
(犬)	ʔinuʼ	ʔinaʼa	ʔinuʼu	ʔiniʼi
(家)	ʔieʼ	ʔijaʼa	ʔijoʼo	ʔieʼe
(外)	soʼto	soʼtaa	soʼtoo	soʼtee

2.1.2 表層上の交替

ハ格は aa~jaa, ヲ格は aa~uu~oo~juu~joo, ニヘ格は ee~ii の交替がある。

2.1.3 語幹と語尾

〈網〉を例にとってみると、語幹と語尾の境について次の三通りの分けかたができる。

(i) 語幹	語尾	(ii) 語幹	語尾	(iii) 語幹	語尾
ʔamiʼ		ʔamiʼ		ʔamiʼ	
ʔamj aʼ	a	ʔam● j	aʼa	ʔamj	aʼa
ʔamj uʼ	u	ʔam● j	uʼu	ʔamj	uʼu
ʔam■ iʼ	i	ʔam● ■	iʼi	ʔam●	iʼi

●や■の所には実際には音が存在しない。

(i)は j が語幹内部に挿入されている。すなわち、

$$(2-1) \quad \phi \rightarrow j / _ \left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\} \& V \quad (j \text{ 挿入 } 1)$$

一方(ii)では j が語幹と語尾の間に挿入されている。すなわち、

$$(2-2) \quad \phi \rightarrow j / \left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\} _ \& V \quad (j \text{ 挿入 } 2)$$

(iii)では語幹末の母音が変化したものであるから、

$$(2-3) \quad i \rightarrow j / _ \& \begin{Bmatrix} a \\ o \\ u \end{Bmatrix} \quad (j \text{ 形成})$$

(i), (iii)の■と●の部分,

$$(2-4) \quad j \rightarrow \phi / _ \begin{Bmatrix} i \\ e \end{Bmatrix} \quad (j \text{ 消去})$$

$$(2-5) \quad V \rightarrow \phi / _ (j) V V^{14)} \quad (V \text{ 消去})$$

音価は,

$$(2-6) \quad V_1 \rightarrow V_2 / _ \& V_2 \quad (\text{逆行同化})$$

によって説明できる. (iii), (iv)のアクセント核の位置については,

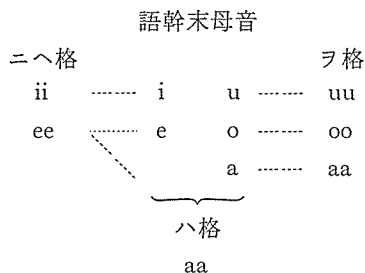
$$(2-7) \quad \begin{Bmatrix} C' \\ C \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} (j) \\ (j) \end{Bmatrix}, \begin{Bmatrix} V \\ V \end{Bmatrix} \rightarrow C (j) V'^{15)} \quad (\text{アクセント核移動})$$

によって説明できる.

2.1.4 基底形

2.1.3から明らかのように, 語幹は原形が基本になっている. 基底形としては, もちろん原形と同じものを選んでおけばよい¹⁶⁾. 一方, 語尾は(i)を採用するか, (iii), (iv)を採用するかで, 基底形が短母音か長母音かの違いが生じるが, それ以外にヲ格の aa~uu~oo, ニヘ格の ee~ii の交替形のうちどれを基底形に選ぶかが問題になる. ハ格が常に aa であることからヲ格は aa を除いた uu~oo のうちから選ぶべきであることがわかる¹⁷⁾.

ヲ格は, 語幹末が a なら aa, 語幹末が i, u なら uu, 語幹末が e, o なら oo である. すなわちヲ格の音価は, 語幹末母音の舌の高さに一致(調和)していることになる. ニヘ格は語幹末が a, e, o なら ee, 語幹末が i, u なら ii である. やはり, 不完全ながら語幹末母音の舌の高さに一致している. ハ格, ヲ格, ニヘ格の母音の音価の一致の仕方を図示すると次のようになる.



ヲ格とニヘ格について次の二つの場合を考えてみよう.

(iv) ヲ格の基底形は /o/, ニヘ格の基底形は /e/

(v) ヲ格の基底形は /u/, ニヘ格の基底形は /i/

(i)でしかも(iv)の場合を選ぶと次の規則が必要になる.

$$(2-8) \quad o \rightarrow a / a \& _ \quad (\text{進行同化})$$

$$(2-9) \quad \begin{bmatrix} e \\ o \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} i \\ u \end{bmatrix} / \begin{Bmatrix} i \\ u \end{Bmatrix} \& _ \quad (\text{進行同化})$$

(i)でしかも(v)の場合を選ぶと次の規則が必要になる。

$$(2-10) \quad u \rightarrow a / a \ \& \text{ — } \quad (\text{進行同化})$$

$$(2-11) \quad \begin{bmatrix} i \\ u \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} e \\ o \end{bmatrix} / \left\{ \begin{bmatrix} e \\ o \end{bmatrix} \right\} \ \& \text{ — } \quad (\text{進行同化})$$

2.1.5 母音体系

j 挿入 1, j 挿入 2 あるいは j 形成から, いずれにしても, i, e が natural class を成していることがわかる. u, o, a に対して i, e は [-back] である. ヲ格とニへ格の同化から i, u および e, o が natural class を成していると考えられる. ハ格が同化しないことから, a に対して i, u, e, o が一つのクラスを成しているものと思われる. 以上の事実から, 母音体系は次のようになっていると考えられる.

	-back	+back	
	i	u	+high
-low	e	o	-high
+low		a	

2.1.6 規則

2.1.5で示した feature を用いると, (2-8), (2-9)は次のようにまとめられる¹⁸⁾.

$$(2-12) \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \langle +back \rangle \\ -high \\ -low \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ \beta \text{ low} \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} V \\ \langle \alpha \text{ high} \rangle \\ \beta \text{ low} \end{array} \right] \ \& \text{ — } \quad (\text{進行同化})$$

一方, (2-10), (2-11)は, 次のようにまとめられる¹⁹⁾.

$$(2-13) \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \langle +high \rangle \\ +back \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ \beta \text{ low} \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} V \\ \langle \alpha \text{ high} \rangle \\ \beta \text{ low} \end{array} \right] \ \& \text{ — } \quad (\text{進行同化})$$

(2-12) と (2-13) からわかることは, (2-9) と (2-11) の違いはさほど重要ではないということである.

2.1.7 代償延長

2.1.3で示した(i)を選ぶか, あるいは(ii), (iii)を選んでも, 語尾の基底形を長母音と考えるかぎり, 以上の規則のみで十分であるが, (ii)もしくは(iii)を選び, しかも語尾の基底形を短母音と考える場合は, 代償延長という規則が余分に必要になってくる. さらに, (ii)の場合 j 挿入 2 の前に母音が長くなるのか, 逆に挿入 2 の後で母音が長くなるのかで二つの場合が考えられる.

(vi) 代償延長が j 挿入 2 に先行する.

(vii) 代償延長が j 挿入 2 に後続する.

(vi)の場合は,

$$(2-14) \quad V \rightarrow VV / V \ \& \ _ \quad (\text{代償延長})$$

なお j 挿入は (2-2) のままでよいか、あるいはむしろ (2-15) のように環境を指定しておくべきかは、今の段階ではよくわからない。

$$(2-15) \quad \phi \rightarrow j \quad / \left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\} \ \& \ _ \ \& \ VV \quad (j \text{ 挿入})$$

vi) の場合は、

$$(2-16) \quad V \rightarrow VV / V \ j \ \& \ _ \quad (\text{代償延長})$$

(vi), vii) のどちらが優れているかを定める唯一の手掛かりは、助詞「や」が付いた時の形がどうかを調べることである。〈網や〉 /?ami' & ja/ は ?ami'ja であって ?amja'a ではない。vi) の方法だと、/?ami' & ja/ には (2-14) が適用できないから、?ami'jaa とはならない。もちろん (2-2) も適用できないから、最終的には ?ami'ja となる。一方 vii) の方法だと、/?ami' & ja/ は (2-15) の適用は受けないが、(2-16) によって ?ami'jaa となり、さらに (2-5) によって ?am'jaa になり、次に (2-7) が適用されて ?amja'a という正しくない形を派生してしまうことになる。〈網は〉 /?ami' & a/ は、?amja'a とならなければならないが、〈網や〉 /?ami' & ja/ は ?amja'a となってはいけないのである。したがって、代償延長に基づく場合の正しい順序及び派生は、次のようであればならないことになる。

〈網は〉	〈網や〉	
/?ami' & a/	/?ami' & ja/	
?ami' & aa		(2-14) 代償延長
?ami'j & aa		(2- 2) j 挿入 2
?am'j & aa		(2- 5) V 消去
?amj & a'a		(2- 7) アクセント核移動
?amja'a	?ami'ja	

なお、代償延長に基づく方法では、進行同化は必要であるが、逆行同化は不要となる。たとえば、〈網を〉の派生は次のようになる。

〈網を〉	
/?ami' & o/	
?ami' & u	(2-12) 進行同化
?ami' & uu	(2-14) 代償延長
?ami'j & uu	(2- 2) j 挿入 2
?am'j & uu	(2- 5) V 消去
?amj & u'u	(2- 7) アクセント核移動
?amju'u	

以上(ii)を選んだ場合の代償延長の方法について見てきたが、(iii)を選んだ場合はどうなるであろうか。この場合、

vi) 代償延長が j 形成に先行する。

(ix) 代償延長が j 形成に後続する.

の二つの場合が考えられる. まず(vii)の場合を見ていくことにする.

〈網は〉	〈網や〉	〈網を〉		
/ʔami' & a/	/ʔami' & ja/	/ʔami' & o/		
		ʔami' & u	(2-12)	進行同化
ʔami' & aa		ʔami' & uu	(2-14)	代償延長
ʔamj' & aa		ʔamj' & uu	(2- 3)	j 形成
ʔamj & a'a		ʔamj & u'u	(2- 7)	アクセント核移動
ʔamja'a	ʔami'ja	ʔamju'u		

今の場合全く問題はない. 次に(ix)の場合を見ていくことにする.

〈網は〉	〈網や〉	〈網を〉		
/ʔami' & a/	/ʔami' & ja/	/ʔami' & o/		
		ʔami' & u	(2-12)	進行同化
ʔamj' & a		ʔamj' & u	(2- 3)	j 形式
ʔamj' & aa		ʔamj' & uu	(2-17)	代償延長
ʔamj & a'a		ʔamj & u'u	(2- 7)	アクセント核移動
ʔamja'a	ʔami'ja	ʔamju'u		

代償延長として(2-17)の規則があれば, この場合も全く問題はない.

(2-17) $V \rightarrow VV / C j \& _$ (代償延長)

(ix)の方法でも問題はなさそうだが, 自然さという観点からすると, (ix)よりは(vii)ほうが勝っているように思われる. 以上まとめると, 代償延長による方法としては,

(vi) 代償延長が j 挿入 2 に先行する.

(vii) 代償延長が j 形成に先行する.

(ix) 代償延長が j 形成に後続する.

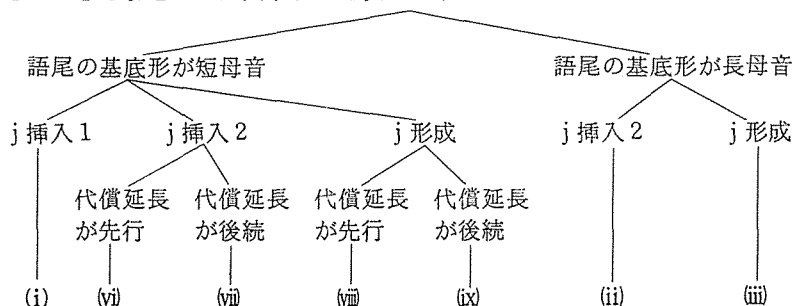
は構わないけれども,

(viii) 代償延長が j 挿入 2 に後続する.

は困ることがわかる.

2.1.8 ま と め

今までのべてきたことをまとめて, 図示すると次のようになる.



進行同化	+	+	+	+	+	+	+
逆行同化	+	—	—	—	—	—	—
V 消去	—	+	+	—	—	+	—
j 消去	+	+	+	—	—	+	—
アクセント核移動	—	+	+	+	+	+	+
分析の適格性	可	可	不可	可	可	可	可
		+	その規則が必要である				
		—	その規則が不要である				

派生例（ただしヲ格の基底形として /o/ を選ぶ）

(i)	〈網は〉	〈網を〉	〈網や〉	
	?ami' & a/	/?ami' & o/	/?ami' & ja/	
	?amji' & a	?amji' & o		(2- 1) j 挿入 1
		?amji' & u		(2-11) 進行同化
	?amja' & a	?amju' & u		(2- 6) 逆行同化
	?amja'a	?amju'u	?ami'ja	

〈網へ〉 /?ami' & e/ → ?ami'i の派生において j 消去が必要である。

進行同化を j 挿入 1 より前に持ってきてよい。たとえば、〈網を〉 /?ami' & o/ → (進行同化) → ?ami' & u → (j 挿入) → ?amji' & u → (逆行同化) → ?amju' & u

(ii)	〈網は〉	〈網を〉	〈網や〉	
	/?ami' & aa/	/?ami' & oo/	/?ami' & ja/	
		?ami' & uu		進行同化
	?ami'j & aa	?ami'j & uu		(2- 2) j 挿入 2
	?am'j & aa	?am'j & uu		(2- 5) V 消去
	?amj & a'a	?amj & u'u		(2- 7) アクセント核移動
	?amja'a	?amju'u	?ami'ja	

j 消去は必要である。進行同化を j 挿入 2 の後に適用することもできる。その場合 (1-3) を & の後で、j を越えても適用できるように修正したものが必要となる。

(iii)	〈網は〉	〈網を〉	〈網や〉	
	/?ami' & aa/	/?ami' & oo/	/?ami' & ja/	
		?ami' & uu		(2-11) 進行同化
	?amj' & aa	?amj' & uu		(2- 3) j 形成
	?amj & a'a	?amj & u'u		(2- 7) アクセント核移動
	?amja'a	?amju'u	?ami'ja	

〈網へ〉 /?ami' & ee/ → ?ami'i の派生において、V 消去が必要である。

(iv)	〈網は〉	〈網を〉	〈網や〉	
	/?ami' & a/	/?ami' & o/	/?ami' & ja/	
		?ami' & u		(2-11) 進行同化

ʔami' & aa	ʔami' & uu	(2-14) 代償延長
ʔami'j & aa	ʔami'j & uu	(2- 2) j 挿入 2
ʔam'j & aa	ʔam'j & uu	(2- 5) V 消去
ʔamj & a'a	ʔamj & u'u	(2- 7) アクセント核移動

ʔamja'a ʔamju'u ʔami'ja

進行同化は j 挿入 2 の後でも構わない。 (ii) の場合を参照。

(vii) <網は>	<網を>	<網や>	
/ʔami' & a/	/ʔami' & o/	/ʔami' & ja/	
	ʔami' & u		(2-11) 進行同化
ʔami' & aa	ʔami' & uu		(2-14) 代償延長
ʔamj' & aa	ʔamj' & uu		(2- 3) j 形成
ʔamj & a'a	ʔamj & u'u		(2- 7) アクセント核移動

ʔamja'a ʔamju'u ʔami'ja

<網へ> /ʔami' & e/ → ʔami'i の派生において、V 消去が必要である。

(ix) <網は>	<網を>	<網や>	
/ʔami' & a/	/ʔami' & o/	/ʔami' & ja/	
	ʔami' & u		(2-11) 進行同化
ʔamj' & a	ʔamj' & u		(2- 3) j 形成
ʔamj' & aa	ʔamj' & uu		(2-17) 代償延長
ʔamj & a'a	ʔamj & u'u		(2- 7) アクセント核移動

ʔamja'a ʔamju'u ʔami'ja

<網へ> /ʔami' & e/ → ʔami'i の派生において、V 消去が必要である。

V 消去を必要とする方法 (ii, iii, vi, viii, ix) は、アクセント核移動を必要とする一方逆行同化を必要としない。逆に V 消去を必要としない方法 (i) はアクセント核移動を必要としないが、逆行同化が必要である。これは、逆行同化が完全同化であることを物語っている。

j 形成による方法では j 消去が不要であるが、j 挿入による方法では j 消去が必要である。たとえば、(i) の方法において、<網へ> は次のように派生される。<網を> と並べてみよう。

<網を>	<網へ>	
/ʔami' & o/	/ʔami' & e/	
ʔamji' & o	ʔamji' & e	(2- 1) j 挿入 1
ʔamji' & u	ʔamji' & i	(2-11) 進行同化
ʔamju' & u		(2- 6) 逆行同化
	ʔami' & i	(1- 5) j 消去

ʔamju'u ʔami'i

もともと不要な j が一旦挿入されて、消去されることになる。一見矛盾するようであるが、<網を> の派生を見るとわかるように、j 挿入と j 消去は違った条件で適用される。もっとも、<網へ> の派生における煩わしさを排除することもできないわけではない。それには、j 消去を必要とす

る環境を結果的に作り出す場合には、はじめから j を挿入しないようにすればよいわけである。そのためには (2-1), (2-2) をそれぞれ (2-18), (2-19) のように改めればよい。

$$(2-18) \quad \phi \rightarrow j / - \left\{ \begin{matrix} i \\ e \end{matrix} \right\} \& \left\{ \begin{matrix} a \\ u \\ o \end{matrix} \right\} \quad (j \text{ 挿入 } 3)$$

$$(2-19) \quad \phi \rightarrow j / \left\{ \begin{matrix} i \\ e \end{matrix} \right\} \& - \& \left\{ \begin{matrix} a \\ u \\ o \end{matrix} \right\} \quad (j \text{ 挿入 } 4)$$

(i) の場合だけ派生を示すと次のようになる。

〈網は〉	〈網を〉	〈網へ〉	
/ʔami' & a/	/ʔami' & o/	/ʔami' & e/	
ʔamji' & a	ʔamji' & o		(2-18) j 挿入 3
	ʔamju' & u	ʔami' & i	(2-11) 進行同化
ʔamja' & a			(2-6) 逆行同化
ʔamja'a	ʔamju'u	ʔami'i	

2.1.9 分析の評価

今まで各種の生成の仕方について述べてきたのであるが、ここで、どの分析が優れているかを考察してみようと思う。もし、規則の数が少ないほうが優れているといえるならば、j 形成の分析が最も優れていることになるが、もう少し違った観点からの評価があってもよさそうに思われる。その一つとして、規則が持っている独立の動機づけ (independent motivation) の数があげられよう。独立の動機づけを多く持っている規則の数が、多ければ多いほど、その分析は優れていると考えられる。次に規則の自然性 (naturalness) の問題が考えられる。たとえば、(2-5a) より (2-5b) のほうが自然である²⁰⁾。

$$(2-5a) \quad V \rightarrow \phi / - \& j V V$$

$$(2-5b) \quad V \rightarrow \phi / - \& V V$$

第三に、適用範囲の狭い規則が多いほどその分析は好ましくないといえよう。たとえば、(2-18) のほうが (2-1) よりも適用範囲が狭い。

$$(2-18) \quad \phi \rightarrow j / - \left\{ \begin{matrix} i \\ e \end{matrix} \right\} \& \left\{ \begin{matrix} a \\ u \\ o \end{matrix} \right\} \quad (j \text{ 挿入 } 3)$$

$$(2-1) \quad \phi \rightarrow j / - \left\{ \begin{matrix} i \\ e \end{matrix} \right\} \& V \quad (j \text{ 挿入 } 1)$$

第四に、派生の途中に実際は有りえない形（発音不可能のものも含む）をどれくらい持っているかということが、一つの基準として考えられる。たとえば、ʔam'juu という形は発音可能であるが存在しない。ʔamji' & u と ʔami' & uu は共に発音可能であるが、後者のほうが発音しやすい。ʔam'juu と ʔamj'uu とでは前者のほうが発音しやすい。

以上の四点を総合すると、(i) の分析が最も優れているように思われる²¹⁾。

(註)

* 本稿は1975年3月に博士課程三年次の報告論文として、京都大学に提出したものに加筆したもの的一部である。

- 1) 虫明氏の記述は正確でしかも体系的である。これを読んで忘れかけていた自分の方言をずいぶん客観的に見直すことができた。しかし、細かい点については、筆者や筆者の祖母あるいは両親のものとわずかに違うものもあった。たとえば、〈手を〉は tjo'o だけではなく tjo'o もある。〈当てよう〉も ?atjoo (~?atjo'o) と共に ?atfoo (~?atfo'o) もないわけではない。これらは〈字を〉が dju'u でなく dzu'u であることを説明するほど容易ではない。もっとも、tjo'o か tjo'o が改めて祖母に尋ねると、返事に困るようであった。〈出よう〉では、また少し事情が異なるようであった。祖母に〈西瓜〉を発音してもらったら、suika ~sʰi:ka ~ʃiika などのバリエントが得られた。
- 2) p. 263 による。ハ格、ヲ格、ニヘ格などの名称は虫明氏に従う。
- 3) æe という母音を持っている話者では sakææ となるはずである。æe という母音を持っていない話者では sakee ~sak^he となる。
- 4) 虫明氏は特に述べておられないが、原形は〈が〉、〈の〉、〈と〉、〈から〉などの格助詞及び〈です〉の前に現れる。〈は〉、〈を〉、〈に〜へ〉の前だけで同化が起こるのは、これらが母音語幹の言葉に付くと、/a/, /o/, /e/ などの母音で始まるからである。
- 5) ニ格とヘ格の区別がないということと同時に、ニ格の ni の n が脱落した結果であるのか、それとも、ヘ格の e によるものか不明である。〈先生に会いに行く〉を祖母は、qence: ni ?ai: ?iku と発音した。しかし、n が脱落する条件はよくわからない。〈酒に酔う〉は、sakee jou とは言わないようである。なお、『方言学講座』第三巻 p. 314 に次のような記述がある。

助詞について特に留意したいものを述べると、共通語では格助詞 e は方向を示し、ni は場所を示すと言われているが、山陰地方ではこの使い分けをしない。因幡郡家町では、e は用いず、すべて ni で示す。浜田町では前行母音が e の時は「酒^エ酔ウ」「燕^エ餌ヲヤル」と e となるが、他の場合は i となる。「学校^イ行ク」「弟^イヤル」など。出雲市では「鳥^ンナル・学者^ンナル・鳥^ネナル・学者^ネナル」と、N, ne が共通語の ni に対応しているが、「東京へ行く」という場合は「東京^エ行ク」という。しかし、i には e が対応するからもともとは石見のように i であろう。隠岐は「中^ヘ・山^ヘ」は naked, jamed という。nakai >naked の変化と考えられる。

似たような現象は、大分にも見られる。大分の鶴崎では「へ」がなくニで表す。しかも ni の n は脱落する。(戸口, 1974: 101~102)

- 6) 岩井 (1975: 237) によれば、中越 (三条など)・佐渡 (真野など)・越中・能登・加賀では〈買う〉、〈買った〉をコー、コータという。また、上村 (1975: 340) によれば、薩摩地方ではモロ=貰う、ヤシノ=養う という。さらに広島県庄原市山内町の土井二五一氏 (1895年生) の発話には、ナッテ シモーカモ シランヨーノー(なってしまうかもしれないねえ)、オモーンデ (思うんだが)、チゴーヨー (違うよね) 等がみられる。(全国方言資料第5巻)
- 7) 〈買う〉、〈買った〉をカウ、カッタと言う地方でも、〈買った〉をユータと言う地方 (青海) がある。一方〈買う〉、〈買った〉をコー、コータと言う地方でも、〈買った〉をイッタと言う地方 (中越の三条) がある。岩井 (1975: 237)
- 8) Venneman (1974: 348-9) によると、語根と接尾辞について次の四つの立場がある。
 - (1) すべての paradigm がレクシコンにおいて、単一の基本形によって指定されていて、補充法 (suppletion) も含めてすべて規則で扱う。
 - (2) 補充的なものはレクシコンに指定されているが、規則の中には生産的でないものもある。
 - (3) 生産的でないものはすべてレクシコンで扱い、生産的なものを規則で扱う。
 - (4) すべてのレクシコンに指定してあり、規則は余剰性の機能を持つ。

Venneman によると, Chomsky-Halle は(2), Hudson が(3)の立場であり, 彼自身の言場は(4)であるという。ところで(4)の立場(彼のいう Natural Generative Phonology)に従うと, /ʔami&a/ から ʔamjaa を導きだすのは音韻規則ではないことになる。岡山方言において音韻規則の資格をもっているものは, s→ʃ / __ i ぐらいしかない。〈手を〉, 〈当てよう〉を tjoo, ʔatjoo と発音する人の場合, tj→tʃ というプロセスは音韻規則ではない。Venneman によれば, 規則の順序は random sequential であるが, これは彼の立場上当然のことであって, だからといって記述の一般性が増大するというものではない。むしろ, レクシコン内部の問題をその場その場で処理せざるをえなくなり, 記述の一般性を大きく欠くことになる。しかもアクセントと分節音の関係が不透明になってしまう。したがって, Venneman やその弟子の Hooper らの考えを受け入れることはできない。本稿では(2)の立場ど固守するが, できるだけ抽象的な基底形を設定することを避ける努力をしている。

- 9) 祖母は明治35年岡山市生まれ, 岡山市育ちである。昭和51年に亡くなる前まで, 筆者は祖母の岡山方言をことある毎に記録する機会に恵まれた。父は大正10年岡山市生まれ, 岡山市育ち。筆者は昭和23年玉野市生まれ, 昭和32年から昭和41年まで岡山市に在住, 昭和41年から昭和45年まで東大阪市, 昭和45年から昭和56年まで京都市, 昭和56年から現在まで吹田市に在住している。母は大正13年津山市生まれであるから, インフォーマントとしてはあまり理想的ではない。母は(Ⅲ)のスタイルを使用している。
- 10) ϕ とか y とかいった母音はみとめられなかった。
- 11) 大体において岡山標準語は全国標準語と分節音は同じでアクセントに違うものがある。しかし, 岡山標準語と岡山方言は分節音の面でも(形態素の違いも含める)アクセントの面でも異なっている。たとえば, 〈やっている(完了)〉は岡山標準語では jatte iru, 岡山方言では jatto'ru という違いがある。
- 12) 助詞はさらに predominating か否かの指定が必要であるが, 本稿ではふれない。
- 13) 名称は虫明氏に従う。
- 14) (iii)の場合は $V \rightarrow \phi / _ \& jVV$ であり, (iv)の場合は $V \rightarrow \phi / _ \& VV$ である。もっとも, この規則は動詞の /tabe&joo/ → tabjoo, /tabe&ee/ → tabee のどちらをも説明できるので, $V \rightarrow \phi / _ \& (j)V V$ としてある。
- 15) (iv)の場合は j がCとして扱われる。 ʔ a m j' a a → ʔ a m j a' a.
CVCCVV CVCCVV
- 16) 〈も〉, 〈から〉等の前では原形が現れる。
- 17) ヲ格を /aa/ と考えるとハ格との区別が音韻的に不可能になる。受身の (r)are と尊敬の (r)are のように, 音韻上全く同じ形を持っているものなら, 形態素の面では違っても音韻的に同一の形を設定することができる。しかし, ハ格とヲ格のように音韻的に違った分布を示すものは, できるなら, 音韻的にも違った形を基底形として設定しておくべきである。
- 18) この規則は次の二つの規則に分けられる。

$$\begin{aligned} \left[\begin{array}{c} V \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ -\text{low} \end{array} \right] &\rightarrow \left[\begin{array}{cc} \alpha & \text{high} \\ \beta & \text{back} \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha & \text{high} \\ \beta & \text{back} \end{array} \right] \& _ \\ o &\rightarrow \left[\begin{array}{c} u \\ o \\ a \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} u \\ o \\ a \end{array} \right] \& _ \\ V &\rightarrow \left[\alpha \text{ high} \right] / \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha & \text{high} \end{array} \right] \& _ \\ \left\{ \begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right\} &\rightarrow \left[\begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} i \\ e \\ a \end{array} \right] \& _ \\ u &\rightarrow \left[\begin{array}{c} u \\ o \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} u \\ o \\ a \end{array} \right] \& _ \end{aligned}$$

- 19)
- $$\begin{aligned} \left[\begin{array}{c} V \\ +high \\ +back \end{array} \right] &\rightarrow \left[\begin{array}{cc} \alpha & high \\ \beta & low \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha & high \\ \beta & low \end{array} \right] \& \text{ ---} \\ u &\rightarrow \left[\begin{array}{c} u \\ o \\ a \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} u \\ o \\ a \end{array} \right] \& \text{ ---} \\ V &\rightarrow [\alpha \text{ high}] / \left[\begin{array}{c} V \\ \alpha & high \end{array} \right] \& \text{ ---} \\ \left\{ \begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right\} &\rightarrow \left[\begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} i \\ e \\ a \end{array} \right] \& \text{ ---} \\ o &\rightarrow \left[\begin{array}{c} u \\ o \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} u \\ o \\ a \end{array} \right] \& \text{ ---} \end{aligned}$$

20) Stong-jensen (1973: 45) は、 $k \rightarrow \check{c} / - \left\{ \begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right\}$ という規則はありえるが、 $k \rightarrow \check{c} / - (VC)_0 \left\{ \begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right\}$ という規則は不可能であると述べている。

21) <本>は、ho'n, ho'nwa, ho'ne, ho'no, ho'nja という変化をするので、語尾の母音は短い。したがって、(iii), (iv)の分析は妥当でないことがわかる。また、二へ核、ヲ核の基底形はそれぞれ /e/, /o/ であることがわかる。ハ核については、/wa/ を規定形として選んでおくと、w 消去 ($w \rightarrow \phi / V \& \text{ --- } a$) によって母音語幹のハ核の形を正しく派生することができる。

参 考 文 献

- 藤原与一 (1972) 「国語方言における [ai] 連母音の諸相」 藤原与一編 (1972) 37-54.
 藤原与一編 (1972) 『方言研究双書第1巻』 広島方言研究所紀要 三弥井書店
 ————— (1973) 『方言研究双書第2巻』 広島方言研究所紀要 三弥井書店
 ————— (1974) 『方言研究双書第3巻』 広島方言研究所紀要 三弥井書店
 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』 搞書房
 国語学会編 (1962) 『方言学概説』 武蔵野書札 1968年版
 服部四郎先生定年記念論文編集委員会編 (1972) 『現代言語学』 三省堂
 早田輝洋 (1972) 「文における声の高さの型について」 服部四郎先生定年記念論文編集委員会編 (1972) 125-146.
 ————— (1972) 「書評 J. D. McCawley *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*」 『国語学』 90 94-103.
 ————— (1974) 「音韻 (理論・現代)」 『国語学』 97 81-90.
 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』 東京堂 1973年版
 ————— (1965) 『日本語の方言』 講談社
 平山輝男編 (1983) 『全国方言辞典1』 角川書店
 広戸 惇 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題 8 鳥取・島根」 東条操監修 (1961) 290-314.
 岩井隆盛 (1975) 「北陸の方言」 大石初太郎 上村幸雄編 (1975) 227-242.
 神戸宏泰 (1975) 「中国の方言」 大石初太郎 上村幸雄編 (1975) 295-315.
 桂又三郎編 (1976) 『岡山県方言集』 国書刊行会
 南不二男 (1962) 「文法」 国語学会編 (1962) 206-256.
 ————— (1975) 「東海の方言」 大石初太郎 上村幸雄編 (1975) 247-263.
 虫明治治郎 (1954) 『岡山県のアクセント』 山陽図書
 ————— (1961) 「方言と実態と共通語化の問題 6 岡山・広島」 東条操監修 (1961) 238-26.
 ————— (1978) 『岡山弁あれこれ』 研文館 吉田書店 1979年版

- NHK 編 (1967) 『全国方言資料第5巻 中国四国編』 1972年版
- 大石初太郎・上村幸雄編 (1975) 『方言と標準語—日本語方言学概説』 筑摩書房
- 佐久間 崇 (1959) 『標準日本語の発音・アクセント』 恒星社厚生閣版 1964年版
- 柴田 武 (1958) 『日本語の方言』 岩波新書 1965年版
- (1962) 「音韻」 国語学会編 (1962) 137-161.
- 重見博一 (1947) 「二重母音の長母音化 (岡山方言)」 『市河博士還暦祝賀論文集』 第二輯63-95.
- 十河直樹 (1973) 『岡山の方言』 岡山文庫 日本文教出版
- Stong-Jensen, M. (1973) 'Two Conditions in Phonology,' *Orange Papers; Syracuse Studies in Linguistics*. Vol. I, No. 1.
- Talbot Alan (1979) 『岡山の日本語』
- 田代晃二 (1966) 『日本語アクセント教習本』 創元社 1970年版
- 徳川宗賢編 (1979) 『論集日本語研究2 アクセント』 有精堂
- 寺川喜田男・金田一春彦・稲垣正幸編 (1951) 『国語アクセント論叢』 法政大学出版局 1954年版
- 戸口茂美 (1974) 「大分県大分市大字鶴崎方言話部音声の研究」 藤原与一編 (1974) 94-144.
- 東条操監修 (1961) 『方言学講座第三巻西部方言』 東京堂
- 楳垣 実 (1962) 「西日本の方言」 国語学会編 (1962) 75-102.
- Venneman, T. (1974) 'Words and Syllables in Natural Generative Grammar,' *Papers from the Parasession on Natural Phonology, CLS*, 346-372.
- 和田 実 (1962) 「アクセント」 国語学会編 (1962) 162-209.

1983年9月17日